

リオリエント

——活動性のアナザー・パラダイム

REORIENT: Another Paradigm of Activity

樽沼範久

「好むと好まざるとにかかわらず、いまや人間にはこういう隣人がいる（…… [中略] ……）そのことを認めなければならない。この隣人は人間の領域を拡張する道に立ちふさがっていて（…… [中略] ……）。どうやら私たちは歴史全体の転換点に立っているようだ—そう私は考えた」（スタニスワフ・レム『ソラリス』〔1961〕）¹。

2020年1月、私は下村寅太郎の著書『アッシシの聖フランシス』（1965）への関心の延長で、ジョルジョ・アガンベン『いと高き貧しさ——修道院規則と生の形式』を読んでいた。ハーマン・メルヴィルが長編『白鯨』（1851）の直後に出した短編「バートルビー ウォール街の物語」（1853）／「バートルビー」（1856）や²、スタニスワフ・レム『ソラリス』（1961）とともに。

そうこうするうちに新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）による感染症（COVID-19）のパンデミック（世界的流行）が拡大し、中国、イタリア、フランス、合衆国などでの都市封鎖や経済社会活動の制限が伝えられた。日本でも2月初旬から横浜港にCOVID-19感染者を乗せたダイヤモンド・プリンセス号が停泊し、その措置をめぐる議論や、それに続く国内検査数や発表感染者数に関する沈黙と喧騒、そして感染した著名人たちの死亡報道のなか、日常生活の緊張感が高まっていく。COVIDの文字までもが頭のなかで、『変身物語』のオウィディウス（Ovidius/Ovid）の名と結合する。COVID-19は私たちの何を変身譚に巻きこんでいくことになるのか。『い

と高き貧しさ——修道院規則と生の形式』をアガンベンが出したのは2011年だが、私にはこの本が、私たちを今まさに捕捉しているSARS-CoV-2 / COVID-19をめぐる世界史的問題に密に関係していると思えてきた。

なぜなら、ここでは生と規則が、自由なる生と規則が対立させられるのではなく、生ないし生の自由と規則とがどこまで一致させられるのか、それが問いになっていたからだ。しかも、アガンベンはここに「活動性本位のパラダイム」とは別の生のパラダイム——昨今の行政主導で喧伝される「新しい生活様式」ではなく、すでに西洋の世界史の渦中に生まれた別の生活様式——を見ようとしていた。それは、「何世紀にもわたる過程を経て西洋の倫理と政治を束縛する結果となった、活動性本位の存在論的パラダイム」から離脱を試みる生と規則の実験なのだ³。

アガンベンは続けて、この本をこう結んでいる。「西洋キリスト教社会の極限的な生の形式として提示されているものが西洋社会にとって今日もなお意味をもつのか、意味をもつとしてどの程度までなのか、それとも、逆に、活動性本位のパラダイムの惑星的な支配が決定的な対決を他の地盤に転移させることを要請しているのかどうかは、新しい展望のなかで対決を再開することから出発してはじめて、決められるだろうということである」⁴。

そう、もちろんアガンベンにしても、修道院生活をフランチェスコ（フランシス）に立ち返って行えというわけではない。「新しい展望のなかで対決を再開することから出発してはじめて、決められるだろう」、というところが肝心だ。それは、2020年にこの本を読む私にとっては避けがたく、COVID-19のパンデミックをめぐる「新しい展望のなかで対決を再開すること」を意味していた。

もうひとつ、生と規則をめぐるアガンベンの議論に私が惹きつけられた伏線には、イスラーム社会の存在もあった。宗教と政治と文化、そして経済、日常生活が同心円を構成するイスラーム社会でもまた、生と規則が対立させられるのではなく、生と規則の一致が実践され続けられている。しかもヤポネシア（日本群島）で「古事記」「日本書紀」が編纂される以前

から、『クルアーン』『ハディース』を典拠に、骨格は変化することなく現在まで。共編著『都市は揺れている』(2020)に収録することになる対談(守田正志+樽沼範久「イスラーム都市から考える」⁵⁾ 準備のため、2019年12月に再読していた井筒俊彦『イスラーム文化 その根底にあるもの』(1981)から引こう。

「少なくとも敬虔な信者である限り、人は法を意識することなしには、日常生活すら生きることができない。そういう仕組みにできているのです。(…… [中略] ……) イスラーム法を叙述した書物を開いてみますと、まず最初に出てくるのは、宗教的儀礼の規則、たとえば、メッカ巡礼のやり方とか、ラマダーン月の断食の仕方、それから日に五回の礼拝の仕方、礼拝に臨む場合の身の清め方——どういう種類の水を、どう使って、体のどの部分をどういう順序で洗うか。水がない場合には水の代わりに砂を使うのが昔の習慣でしたが、どんな砂をどんな風に使ったらいいのか。ところが、すぐその次に、われわれなら民法、親族法として取り扱うはずの家族的身分関係を律する細かい規則が出てきます。結婚、離婚、再婚、持参金、遺産相続、扶養義務、などです。そうかと思うと次に、それにすぐ続けて、今度は商法関係になって、取引の正しい仕方、契約の結び方、支払いの方法、借金の仕方、借金返済の方法などです。次は刑法的規定で、窃盗、殺人、姦通、詐欺、偽証など。そうかと思うと、食物や飲み物、衣服、装身具、薬品の飲み方、香料の使い方、挨拶の仕方、女性と同席し会話するときの男性の礼儀、老人に対する思いやりの表わし方、孤児の世話の仕方、召使いの取り扱い、はては食事のあとのつま楊枝の使い方、トイレットの作法までである。これほどまでに決めなくても、われわれならつい思いたくなるほど、社会生活から家庭生活の細部に及んで詳細に規定されているのであります」⁶⁾。

こうしたイスラーム社会では、殊更に「新しい生活様式」などとスローガンを掲げなくても、『クルアーン』『ハディース』を典拠にした規則=生に、

すぐさま COVID-19対策としての規制や規則も取り込まれ、日常生活と同心円を描いていくものなのか、あるいは規則=生の齟齬の調停に解釈の工夫を要するものなのか。何れにしても、自由な生と規則・規制を対立させて議論が進んでいくことはないだろう。

付言すれば、『監視と処罰——監獄の誕生』（1975）刊行後の1978年、ミシェル・フーコーは鈴木大拙などの書も読んで来日し坐禅も組んだほか、イラン革命のルポルタージュを引き受け、テヘランに赴いて、宗教的指導者たちに会っている（イスラームではそれは政治指導者、生活指導者でもある）。フーコーの関心事は年譜によると、「今日、マルクス主義の圏域の外で、集団的な実存に不可欠な目標がどのように成立するかを知ること」だったという⁷。『監視と処罰』は、監視や規制による生の管理を批判する議論で言及されることが多い。だが、フーコーは少なくとも『監視と処罰』刊行後、禅仏教そしてイスラームも媒介にして、統治性と自己をめぐる思考の途上、生と規則が対立させられるのではない生の様態を探ろうとしていたのではないか。

ところで、「活動性本位のパラダイムの惑星的な支配が決定的な対決を他の地盤に転移させることを要請しているのかどうか」とは、どういう事態を指しているのだろうか。『いと高き貧しさ』のアガンベンは、その問題を展開することはない。ただ、「他の地盤に移転させることを要請している」のも、他ならぬ「活動性本位のパラダイムの惑星的な支配」と言われている以上、「他の地盤」は「活動性本位のパラダイムの惑星的な支配」から離脱したところではなく、むしろその延長線上に生じることが想定される。例えばフーコーならば、「生権力の過剰」と呼ぶような事態である。

フーコーは1984年にヒト免疫不全ウイルス（HIV）感染による後天性免疫不全症候群（AIDS）で亡くなるが、『監視と処罰——監獄の誕生』刊行と同時期の、コレージュ・ド・フランス講義「社会は防衛しなければならない」（1975-76年度）では、人工的に製造されながらも管理不可能なウイルスに言及しながら、こう語っている。「生権力の過剰が生じるのは、生命を調節するばかりか、生命を繁茂させ、生物を製造し、怪物を製造し、究極には管理不可能で普遍的破壊力を持つウイルスを製造することが技術

的にも政治的にも人間にとって可能になる時です」⁸。

フーコーとアガンベンを結合させて考えるならば、こう推論されるのではないか。すなわち、「生権力」による管理・調整の延長上でありながら、その地盤には収まらず、「究極には管理不可能で普遍的破壊力を持つ」「生物」や「怪物」を「繁茂」させるような事態。それが「活動性本位のパラダイムの惑星的な支配」をその延長上に、あるいは「生権力」をその過剰な加速化の果てに、「別の地盤に転移」するのだと。そしておそらくは、管理・調整に回収されない「製造」の秘密がここに関与している。

新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) の人工製造説が流れてきたときには、とうとうフーコーの予言する事態が到来したのかと想像した。人工的製造説はおそらくフェイクニュースだったにせよ、しかし、こうしたウイルスの変異や世界史への登場が、現代の人間の都市的かつ移動的な活動に媒介されているのだとしたら、それは非計画的な準人工製造と見なしたほうが正確なのかもしれない。のみならず、このウイルスの世界同時多発的拡散を契機に、「活動性本位のパラダイムの惑星的な支配」が減速すると同時に、あたかもそれが「別の地盤に転移」する幕間のように見えてしまった。「究極には管理不可能で普遍的破壊力を持つ」「生物」や「怪物」の「繁茂」が、いかに「活動性本位のパラダイムの惑星的な支配」を左右するのか、そして、それが「技術的にも政治的にも人間にとって可能になる時」に、何が起こるのかということ。

ただ、上記の事態は21世紀になって初めて生じたことでは、おそらくない。それは、下村寅太郎が『科学史の哲学』(1941)や座談会「近代の超克」(1942)で論じた「機械」の活動に相当すると思われるからだ。「製造」の秘密に潜ろうと書かれた、『科学史の哲学』の最後に登場する論考「現代における人間の概念——自然における人間の地位」(1940)から引こう。

「より深刻な本質的な問題は、自然征服が単に一方的に人間の自然征服ではなくて、同時に逆に自然の人間制約となることである。人間が自然の深部に入りこむことによって逆に自然が人間の内部に入り来ることである。「戦争」がその一つの範例である。(…… [中略])

……) 自然は人間のより内部に入りこみ——人間をして人間をより強力に殺戮せしめる。鋭利なる武器は敵に対してのみ鋭利ではあり得ない。武器が「道具」的から「機械」的となるに従ってますますその苛烈さを増す。(…… [中略] ……) 戦争は単に人間と人間とが相戦うのではなく、自然の主体化を挟んで相戦うのであり、人間と人間とが相戦うことにおいて自然自身が人間の中に介入し、人間を媒介にして自然自身の内部が、深部が露呈されて来る。(…… [中略] ……) 歴史は単に人間の歴史ではない⁹。

この文章は、発表当時の戦争を背景に書かれたものには違いないが、「戦争」は下村が書くように「一つの範例」である。ここでの「自然」を、ウイルスと置き換えて読むこともできるはずだ。ウイルスを「一つの範例」にすると、「自然の主体化」という様態も、「自然自身が人間の中に介入し、人間を媒介にして自然自身の内部が、深部が露呈されて来る」というプロセスも、そして「歴史は単に人間の歴史ではない」という世界史の真実も、より一層、判然とするのではないだろうか。それどころか、あまりの具体性に私たちを震撼させる言葉と化すのではないだろうか。

その下村寅太郎もまた、聖フランシス（フランチェスコ）に関心を寄せていた。フランシス（1182-1226）は親鸞（1173-1263）の同時代人だ。「北国に流され、関東に漂泊してからの生活」で「大悟をして大地に連絡をつけた」と鈴木大拙が説く親鸞の¹⁰。ロベルト・ロッセリーニ監督『神の道化師、フランチェスコ』（1950）を観たかどうか、それはわからないが、下村には『アッシシの聖フランシス』（1965）という著作がある。この本が「上梓されたとき、著者従来の関心の圏外にあるものとして、一般にやや意表を衝いた感を与えた」という¹¹。下村寅太郎といえば科学史のイメージが強く、『ライプニッツ』『科学史の哲学』の著者として知られていたからだろう。座談会「近代の超克」で対峙したカトリック信者の吉満義彦とは違い、下村はキリスト教の信者でもなかった。

1963年11月9日、日本学術会議「科学史・科学基礎論シンポジウム」からの帰路、国鉄鶴見事故の犠牲となった三枝博音と「生死を分けた」こ

とから¹²、信心深くなったわけでもない。1956年の初めてのヨーロッパ旅行、そしてその旅行を起点にした「西欧旅行記の一部としてのアッシジ紀行が動機となった。これにおいてフランシス理解を新たにした」と、下村は述べている。「小鳥の説教や太陽の歌の抒情詩的な解釈が徹底的な誤解、むしろ無理解であることを痛感した。フランシスの単純素朴に見える言動や生活は、実際にはおそるべき峻厳な路であり、真にラディカルな性格のものであることを学んだ」と¹³。フランシスと兄弟たちは、「共同体に依存しない、寧ろ依存



図1『下村寅太郎著作集3 アッシジの聖フランシス』口絵。チマブーエ《玉座の聖母子と4人の天使と聖フランチェスコ》(1278-80, アッシジの聖フランチェスコ聖堂)の一隅。

し得ない。(…… [中略] ……) 特定の場所に定住すべく拘束されない、定住すべき家をもたない。(…… [中略] ……) そしておよそ福音の説教を聞く魂の存する所へは世界の何処へも進んで赴かんとする」¹⁴。

だからフランシスと兄弟たちは、「活動的生」と区別された「観照的生」「観想的生」に向かおうとしているのではない。近代における「観想的生」と活動的生との伝統的な位階秩序の転倒¹⁵によって、転倒させられたと考えられる「観照的生」「観想的生」を保持したのではない。そうではなく、フランシスと兄弟たちは活動性そのものだった。活動性のアナザー・パラダイムを生きたのである。

「共同体に依存しない、寧ろ依存し得ない」、「特定の場所に定住すべく拘束されない、定住すべき家をもたない」。これは「おそるべき峻厳な路」であると同時に、私たちの生きる現代の条件を圧縮あるいは加速したものに思われる。『ソラリス』のレムが「H・G・ウェルズ『宇宙戦争』論」(1974)で書いている事態は、2020年からのパンデミックによっても、ますます今日の万人のものになっているからだ。『『宇宙戦争』の執筆とわれわれと

を隔てるおよそ九十年足らずの間に、文明の状態は一八〇度転換した(…… [中略] ……)。ウェルズが執筆活動をした社会はすっかり硬直し——さらに重要なことには——その状態が続くことを信じて疑わなかった。つまり、大災害や変化に見舞われることはないと皆が考えていた。だからこそ、ウェルズの初期の優れた作品群は、視野を切り開き、迫りつつある文明の揺らぎを予言したのである。その一方で、われわれが生きているのは、明日が今日の繰り返しではないということ以上に確かなものは何もない世界である」¹⁶。

ならば、フランスと兄弟たちに宿された活動性のアナザー・パラダイムは、「活動性本位のパラダイムの惑星的な支配」に屈したかに見える世界史に、新しい方向を与える活動性の路を指し示しているのではない。活動性のアナザー・パラダイムは、レムが語るような現代の条件を「活動性本位のパラダイムの惑星的な支配」と共有すると同時に、現代の条件に対する関係によって、そこから分岐していくからだ。

「活動性本位のパラダイムの惑星的な支配」は、現代の条件から私たちの目を逸らせつつ、「明日が今日の繰り返しではないということ以上に確かなものは何もない世界」から生じる不安を活用することで、その支配を強化する。それに対して活動性のアナザー・パラダイムは、現代の条件に私たち自身の生を重ね合わせ、「明日が今日の繰り返しではないということ以上に確かなものは何もない世界」の規則それ自体を、私たちの生の路とするのである。これは「おそるべき峻厳な路」には違いないが、私たちの生きる現代の条件そのものの路でもあることを忘れるわけにはいかない。

最後に、オリヴィエ・メシアン作曲・台本のオペラ『アッシジの聖フランチェスコ』(1983)にも触れておこう。これは晩年のメシアンが、病とともに生きるなか、8年をかけて完成させた唯一のオペラ作品である。第一幕(第1景「十字架」、第2景「賛歌」、第3景「重い皮膚病患者への接吻」)、第二幕(第4景「旅する天使」、第5景「音楽を奏でる天使」、第6景「鳥たちへの説教」)、第三幕(第7景「聖痕」、第8景「死と新生」)。

20世紀後半の新しいオペラ作品というだけでも、時代錯誤のように映るかもしれない。器楽と声楽と演劇を合体させた総合芸術「オペラ」は、

17世紀から20世紀初頭にかけて、西欧諸国が世界に覇権を拡大していった時代に隆盛を誇ったが、20世紀後半になると、演出の装いを新たに上演されることは多々あっても、新しいオペラ作品を生み出すことは芸術史の前線から退いたと言えるだろう。

芸術史の前線にある20世紀後半の「オペラ」作品となると、オペラを批判的に解体する「オペラ」になる。フィリップ・グラス作曲、ロバート・ウィルソン演出、ルシнда・チャイルズ振付の『浜辺のアインシュタイン (Einstein on the Beach)』(1976)、あるいは18、19世紀のオペラを断片化し、偶発的にコラージュしていくジョン・ケージ『ユーロペラ』I-V (1987-91)が、そうした代表的な作品になる¹⁷。これに対して、メシアン『アッシジの聖フランチェスコ』は『浜辺のアインシュタイン』『ユーロペラ』のようには、西欧近代のオペラとは異質であることが一目瞭然ではない。

しかしながら『鳥のカタログ』(1956-58)など、鳥の鳴き声に傾注し続けたメシアンは、1962年に来日したときには信州の軽井沢で鳥の鳴き声を採譜したように、オペラ『アッシジの聖フランチェスコ』の作曲時にも、アッシジのみならず、ニューカレドニアにも足を運んで、鳥たちの鳴き声を採譜した。そして第二幕の第6景「鳥たちへの説教」に限らず、オペラ『アッシジの聖フランチェスコ』には、採譜した鳥たちの鳴き声をモチーフにした音が散りばめられている。このオペラは、聖フランチェスコの歩みの物語の至るところで、彼の生涯の物語と同時に進行するパラレルワールドのように、人間と鳥たちが交錯した活動性を示していくのだ。「活動性本位のパラダイムの惑星的な支配」でも、活動性のアナザー・パラダイムでも、もはや「歴史は単に人間の歴史ではない」。そして、自然は単に人間の歴史と離れた自然ではない。

“Oh, have you ever woke up from a daydream/ And realized that the world's gone crazy?/ You people are all the same/ Going blah blah blah, going bang bang bang/ …/ I'll doing me chillin' at the bottom of the sea and I say/ I'm happy just being a prawn/ …/Prawn, prawn/ Oh, have you ever seen the prawn cause a world war?”

(Superorganism, 'Prawn Song', *Superorganism*, 2018)

“Nothing's gonna change our 'changing' world” (偽ジョン・レノン)

1. スタニスワフ・レム『ソラリス』[1961]、沼野充義訳、国書刊行会、2004年、288-289頁；ハヤカワ文庫、2015年、323-324頁。
2. ハーマン・メルヴィル『バートルビー』[1856]、ジョルジョ・アガンベン『バートルビー 偶然性について』[1993]、高桑和巳訳、月曜社、2005年、91-159頁。
3. ジョルジョ・アガンベン『いと高き貧しさ——修道院規則と生の形式』[2011]、上村忠男・太田綾子訳、みすず書房、2014年、195頁。
4. 同前。
5. 守田正志＋樽沼範久「イスラーム都市から考える」、吉原直樹・樽沼範久／都市空間研究会編『都市は揺れている——五つの対話』、東信堂、2020年、93-122頁（守田「ルフェーヴルの向こう岸」、樽沼「地中海世界のヴェネツィア」を含む）。
6. 井筒俊彦『イスラーム文化 その根底にあるもの』[1981]、岩波文庫、1991年、160-161頁。
7. 『年譜』、『フーコー・コレクション フーコー・ガイドブック』、小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編、ちくま学芸文庫、2006年、308-313頁。
8. ミシェル・フーコー『社会は防衛しなければならない コレージュ・ド・フランス講義1975-76年度 ミシェル・フーコー講義集成VI』[1997]、石田英敬・小野正嗣訳、2007年、252頁。
9. 下村寅太郎「現代における人間の概念——自然における人間の地位」[1940]、『科学史の哲学』[1941]、『下村寅太郎著作集1 数理哲学・科学史の哲学』、みすず書房、1988年、327-328頁；『科学史の哲学』、みすず書房、〈始まりの本〉、2012年、237頁。
10. 鈴木大拙『日本的靈性』[1944]、角川ソフィア文庫、2010年、76頁。
11. 竹田篤司「第三巻について」、『下村寅太郎著作集3 アッシジの聖フランシス』、みすず書房、1990年、297頁。
12. 「国鉄鶴見事故。三枝博音（71）が犠牲者の一人になる」。「同日、下村は日本学術会議「科学史・科学基礎論シンポジウム」に出席、三枝（下車駅・北鎌倉）とともに東京駅横須賀線ホームにまで到るが、下村は「逗子まで立って帰ってもよい」と先発列車に乗り、三枝と生死を分けた」（「下村寅太郎の百年 年譜／著作目録」、『下村寅太郎著作集13 エッセ・ビオグラフィック』、みすず書房、1999年、613頁）。
13. 下村寅太郎「後記」、『下村寅太郎著作集3』、前掲書、295頁。この「西欧旅行記」は、雑誌『心』に1959年4月号から1961年4月号にかけて22回連載されたあと、『ヨーロッパ遍歴 聖堂・画廊・広場』（未来社、1961年）として刊行されている。イスタンブール（コンスタンティノープル）から入るこの旅行と旅行記は、あまり注目されていないようだが、「ヨーロッパ遍歴」を通じたオリент、非西欧のパラダイム再発見の書でもある。その一端を、樽沼範久「地図のある歴史——都市科学者と世界的空間」、「非都市のエレメント——この惑星を構成するものたち、そして水の法」、『都市科学事典』、春風社、2021年、174-175、1018-1019頁）に記した。なお、〈東洋〉から自らを切り離して生成する〈西欧〉の「大なる分割の歴史」を宣するミシェル・フーコー『『狂気の歴史』初版への序文』（1961）は、レム『ソラリス』や下村『ヨーロッパ遍歴』と同年の出版であり、後出のアーレント『活動的生』とも合わせた同時代の思想的星座を構成すると考える。
14. 下村寅太郎『アッシジの聖フランシス』[1965]、『下村寅太郎著作集3』、前掲書、214頁。
15. ハンナ・アーレント『活動的生』[1960]、森一郎訳、みすず書房、2015年、378頁；

- 『人間の条件』[1958]、志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994年、456頁。
16. スタニスワフ・レム「H・G・ウェルズ『宇宙戦争』論」[1974]、井上暁子訳、スタニスワフ・レム『高い城・文学エッセイ』、沼野充義、巽孝之、芝田文乃、加藤有子、井上暁子訳、国書刊行会、2004年、308頁。
 17. 樽沼範久「20世紀の文化における宇宙的なものの上昇——宇宙機械と人新世の通夜＝覚醒のために」、『常盤台人間文化論叢』第4巻、横浜国立大学都市イノベーション研究院、2018年、65-88頁；樽沼範久「芸術とポストモダニズム——範例としての『浜辺のアインシュタイン』」、『美学の事典』、丸善、2020年、346-347頁。

(都市イノベーション研究院・教授)